

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第11回

森の彫刻家

上 床 利 秋

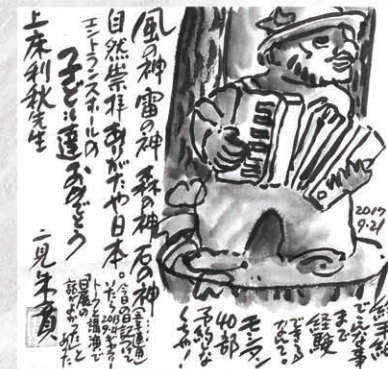
## 絵手紙の贈り物

9月21日、小雨のそほ降る中を絵手紙の研究グループが杉アトリ工を訪問してくださいました。

総勢40名に近い人たちが乗用車に乗り分けて来られたのだから、さそや森の小鳥たちや、にゃんも驚いたに違いない。

塾長の二見朱実先生が以前、高村光太郎の湖畔の彫刻像と青森県で出会った時の思い出話を語ってくださいました。光太郎の晩年のイメージを、私の杉アトリ工に重ねていただけるのは光栄なことである。

1. お客様に囲まれて私は、森の中にアトリ工を選んだ理由。
2. 等身大彫刻は文学で例えれば小説のようなもの。



3. 感動を経験から得た技術で表現する世界は手慣れてくると、やがて技術に溺れて感動する心が薄らいでしまうこと。を、語らせていただいた。

絵手紙は日々の出来事をハガキサイズの中に記し、一筆添えて読む相手に届けることで完結する。常にモノに対する新鮮な自分の感性を研ぐことを必要とする世界。具象彫刻家が陥りやすいマンネリズムに対して、この人たちは鋭く見抜く力が育っているのだと思うことだった。

杉アトリ工での、あつという間のひとときを過ごした後に、みんなで鹿児島第一幼稚園新設のための「風神子雷神子」設置工事を見学に行った。強烈な疾風怒涛の一日になった。

後日、この方たちからの絵手紙が続々届いた。私にとっては一枚一枚が宝石のように煌いて見えた。ここに紹介させていただく。こちらこそありがとうございます。

日展会員 第一幼児教育短期大学教授

